

論文審査結果の要旨

氏名 大沼 久美子

養護教諭は、保健室で様々な症状や訴えで来室する子どもに多岐にわたる対応をしている。その際、子どもの心理的・社会的側面を把握し健康課題を解決に導くことは重要である。養護教諭は学校に単数配置である場合が多いため実践を共有し省察する機会が少ないが、経験の有無に関わらず的確な判断と処置・対応が求められる。このことから的確な対応に資する心理的・社会的アセスメント手法を開発することが必要であると著者は考え、この目的に沿い研究した結果が本学位論文である。

本論は 3 章より構成され、第 I 章では養護教諭が行う心理的・社会的アセスメントの実態から、アセスメントのための情報収集の枠組みを調査・解析して提示した。第 II 章では、枠組みに沿ってその下位項目を検討してアセスメントシートを開発した。第 III 章では、シートの実用性を量的および質的調査の両面から検討した。

【対象】第 I 章は、平成 23 年度全国学校総覧に記載されている小・中・高等学校から無作為抽出した各 1,000 校（計 3,000 校）の養護教諭を対象とした。第 II 章は、無作為抽出した小・中・高等学校各 500 校の養護教諭が対象である。第 III 章の量的調査は平成 26 年夏季に行った免許更新講習または研修会に参加し同意の得られた養護教諭 50 名を対象とした。質的調査の対象は、小・中・高等学校別、経験年数 3 群別の養護教諭 9 名である。

【方法】養護教諭の実践に基づいた理論構築を行うため、養護教諭経験 10 年以上を有する小・中・高等学校に勤務する現職養護教諭 8 名と、大学研究者 4 名によるヘルスアセスメント研究会を組織し、本研究を遂行した。第 I 章では、心理的・社会的アセスメントの実態を明らかにするために、2011 年 10 月に郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。未記入の回答項目がない 1237 校を分析対象とした（有効回答率 82.1%）。重要度が高く実施度が低い項目を優先改善項目とし、重要度について数量化Ⅲ類により情報収集枠組みを検討した。第Ⅱ章の下位項目はデルファイ法により、ヘルスアセスメント研究会で設定し、下位項目の信頼性と妥当性を学校種別に検討した。約 3 か月の期間を空けて郵送法による無記名自記式質問紙調査を 2 回行い、2 回とも不備がない回答が得られた 274 名につき探索的因子分析をした。2 回の因子得点につき Pearson の相関係数算出と因子得点間の有意差検定（有意確率＜0.05）を行った。第Ⅲ章は、第Ⅱ章で示した下位項目で構成した心理的・社会的アセスメントシートを提案し、各項目の 5 段階評価につき χ^2 検定を行った。質的調査は半構造化面接法による面接を実施し、内容を IC レコーダに録音した。

【結果及び考察】第 I 章では、質問群 30 項目中 28 項目で重要度の平均値が実施度の平均値を上回り、ほとんどの項目が重要とされた。重要度は「生活習慣アセスメント」「身体症状のアセスメント」「清潔アセスメント」「身近な人との関わりアセスメント」「子どもの可能性アセスメント」の 5 つの枠組みが示された。これらの枠組みはマズローの欲求理論に則り解釈できた。

各枠組みの下位項目は、小・中・高等学校別に作成すべきことが示唆された。第Ⅱ章では、生活習慣アセスメントは小学校（4因子 31項目）、中学校（3因子 29項目）、高等学校（4因子 29項目）で、信頼性と妥当性が確認された。身近な人との関わりは、小学校（4因子 46項目）、中学校（4因子 52項目）、高等学校（5因子 36項目）で構成され、「ストレス」に関する内容の再検討が必要となった。子どもの可能性アセスメントは、小学校（6因子 53項目）、中学校（6因子 53項目）、高等学校（7因子 56項目）で構成され、「携帯・スマホ・ネットなどの使用」の内容及び中学校、高等学校で「対人意識」の内容の検討が必要となった。身体症状アセスメントは、各学校種共通に5項目で構成され、信頼性と妥当性が確認された。清潔アセスメントは、高等学校で1項目検討を要した。第Ⅲ章では、学校種別の「心理的・社会的アセスメントシート」の結果を折れ線グラフで「見える化」した。健康相談活動のプロセスに基づき18の評価項目を設定し、試行後に評価を得た。9名の面接調査では、「使える」と回答した者が有意に多く、子どもの状態が客観的に捉えられ見落としがなくなること、連携の資料に活用できるなどが利点として挙げられた。課題は項目数が多い点であった。項目間の相関や表現の工夫により項目数を縮約し「改良版」を提案した。

以上より、心理的・社会的アセスメントは5つの枠組みであること、学校種別に下位項目は異なること、これらを構成した「養護教諭が行う心理的・社会的アセスメントシート」の提案は、養護教諭が子どもの健康課題を解決するために役立つツ

ルとなる可能性が示唆された。今後「改良版」の評価が必要であるが、これまで実践知や経験知に委ねられていたアセスメントについて、系統的に把握するための新たな知見が示されたといえ、博士（保健学）の授与に値するものと考えられる。

（本研究の調査は香川栄養学園実験研究に関する倫理審査委員会（第 223 号）の承認を得て実施した。）

【論文審査委員】

(委員長)	教授	武藤	志真子
	教授	宮城	重二
	教授	山下	俊一
	教授	小林	正子
	教授	武見	ゆかり